看護実践学会誌　Journal of Society of Nursing Practice, Vol.35, No.2, pp.31～32, 2023

実 践 報 告

わが病院看護自慢

根拠のある個別ケアを目指して
－体動センサー活用による生活の可視化から－

大西　真奈美

医療法人社団和楽仁　芳珠記念病院

日　　時：2022年９月24日㈯　13：00～14：00
開催方法：WEBによるオンライン開催（芳珠記念病院より配信）
参 加 者：外部施設からの参加者13名
内　　容：１．芳珠記念病院の紹介
２．体動センサー導入の経緯
３．体動センサー「眠りスキャン®」について（株式会社パラマウントベッド担当者）
４．自施設における活用事例の紹介

１．開催状況

2022年９月24日㈯に、わが病院看護自慢「根拠ある個別ケアをめざして－体動センサー活用による生活の可視化から－」を開催いたしました。芳珠記念病院での体動センサーの医療現場における活用の実際について報告させていただきました。コロナ禍という事もあり、オンラインでの開催となりましたが、外部施設から13名の方にご参加いただきました。

２．体動センサー導入の経緯

芳珠記念病院（以下当院）は一般病棟（３病棟）、地域包括ケア病棟、回復期リハビリテーション病棟、障害者病棟、介護医療院を有しています。今回、体動センサー（以下眠りスキャン®）を導入した経緯は、2019年に介護療養病棟が介護医療院に転換したことがきっかけでした。介護医療院は医療的ケアを行える場と在宅として生活の場を兼ね備える新しい環境として整備する必要がありました。それまでは、行動の予測が困難なケースは、ホールで見守りをする（近位見守り）ことがありました。しかしながら生活の場としては不適切であることから、遠位見守りができる環境を考える必要がありました。介護報酬改定では介護現場にICTを活用し業務負担の大幅な軽減と業務の効率化を図ろうという動きが加速していたこともあり、60床に導入することになりました。導入後の評価として、ホールで見守りをしていた利用者は夜間でも自室に戻り、遠位見守りができるようになりました。また、呼吸数の変化から発熱への対応につながる事例や、鎮痛剤の使用効果を評価でき、安楽な環境の提供につながった事例を経験しました。導入当初から介護医療院で成果を実証できれば一般病棟にも展開したいと考えての取り組みでしたので、感染病床での使用も含め、活用事例を増やし評価しました。（2022年11月一般病床導入済）

３．眠りスキャン®について

眠りスキャン®には以下の機能があります。①睡眠、覚醒、離床、起き上がりといった利用者の

連絡先：大西　真奈美
医療法人社団 和楽仁 芳珠記念病院
〒923-1226　石川県能美市緑が丘11丁目71番地

今の状態がPC画面上で可視化できる「リアルタイムモニター」、②睡眠日誌によって夜間の睡眠習慣を確認できる、③心拍/呼吸数の推移を可視化することで体調の変化を気づきやすくなる、の３点です。行動を予測することで転倒転落防止につなげる、睡眠日誌をカンファレンスで活用し、眠剤投与のタイミングや内容変更につなげることも期待されます。

４．活用事例の紹介

２つの病棟と１つのワーキンググループから事例提供しました。

事例１　92歳　女性　膝蓋骨骨折

リハビリ段階でもありましたので１日の行動を把握する目的で睡眠日誌を活用しました。日中の行動も含めレポートを見ながらのカンファレンスによって眠剤投与時間を話し合ったり、薬剤内容を薬剤師と検討しました。生活リズムが可視化でき、情報共有が効果的でした。

事例２　84歳　女性　大腸がん術後

疼痛コントロールができているかの判断を睡眠日誌で振り返った事例です。上手く看護介入ができなかったのではないかという反省も含め振り返りを行い、今後のケアにつなげようとしていました。

事例３　90歳　女性　褥瘡状態悪化

褥瘡ケアチームが報告した事例は、除圧の体位が安楽であるかを検証出来た事例でした。訴えが十分できない利用者も多く、苦痛の程度が評価できない方の場合、介入が遅れることも懸念されます。睡眠日誌や呼吸・心拍日誌の活用で、客観的にタイムリーにアセスメントし、効果的な看護介入につなげていました。

５．開催後アンケート結果

８名の方からご回答を頂きました。自由記載の内容を一部記入します。

「睡眠や覚醒が可視化され、ケアにいかされている」「体動センサーのことを離床キャッチも含む内容かと思っていた。他の使い方としては、コロナ陽性者の入院患者には、睡眠センサーが有効だと感じた」

「一つのツールで、それぞれの部署やチームでの活用の実際がわかりやすく、看護につなげられていることがよく分かりました。療養者のフィジカルアセスメントや生活リズムなど、とても把握しやすいツールであると思った」と感想を頂きました。また、「実際に見ることが出来るとさらに良かった」との意見も頂き、動画等での発表もあると効果的だったと感じました。

【まとめ】

途中、音声・画像トラブルも発生しましたが、参加の方々には最後までご視聴頂きました。施設内でも事例を振り返る事、まとめることで多くの意見を共有でき、準備というプロセスが有意義であったと感じます。生産年齢人口の減少で働き手の確保がますます困難になることは予測されます。そのような中でも、利用者の生活を可視化し、状態を読み取ろう、何かできることはないかと考えているスタッフを頼もしく感じています。AIやICTの活用により、「働きやすさ」だけでなく「働きがい」や「達成感」にもつながることを目標にしていきたいと考えています。